

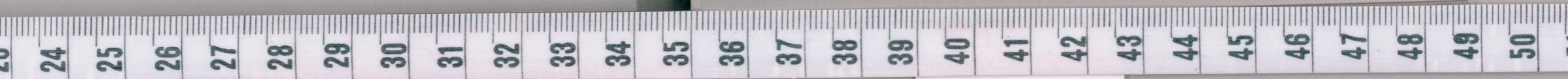
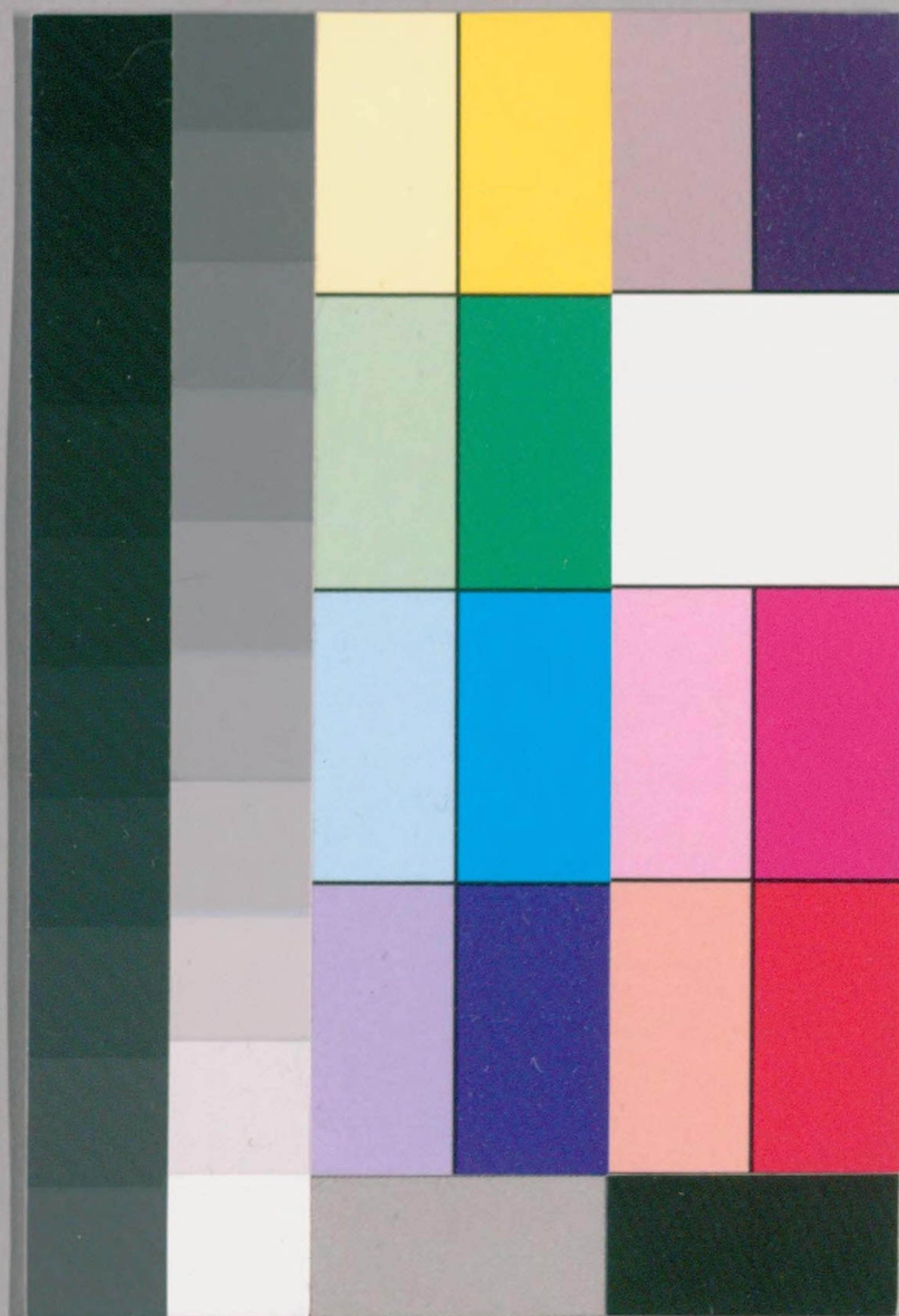
851  
5

卷之五

採草の  
み十七種  
花葉の圖  
色付ケ

廣益地錦抄

八



国立国会図書館 請求記号 851-5  
タイトル『広益地錦抄 8巻』

ガラス使用

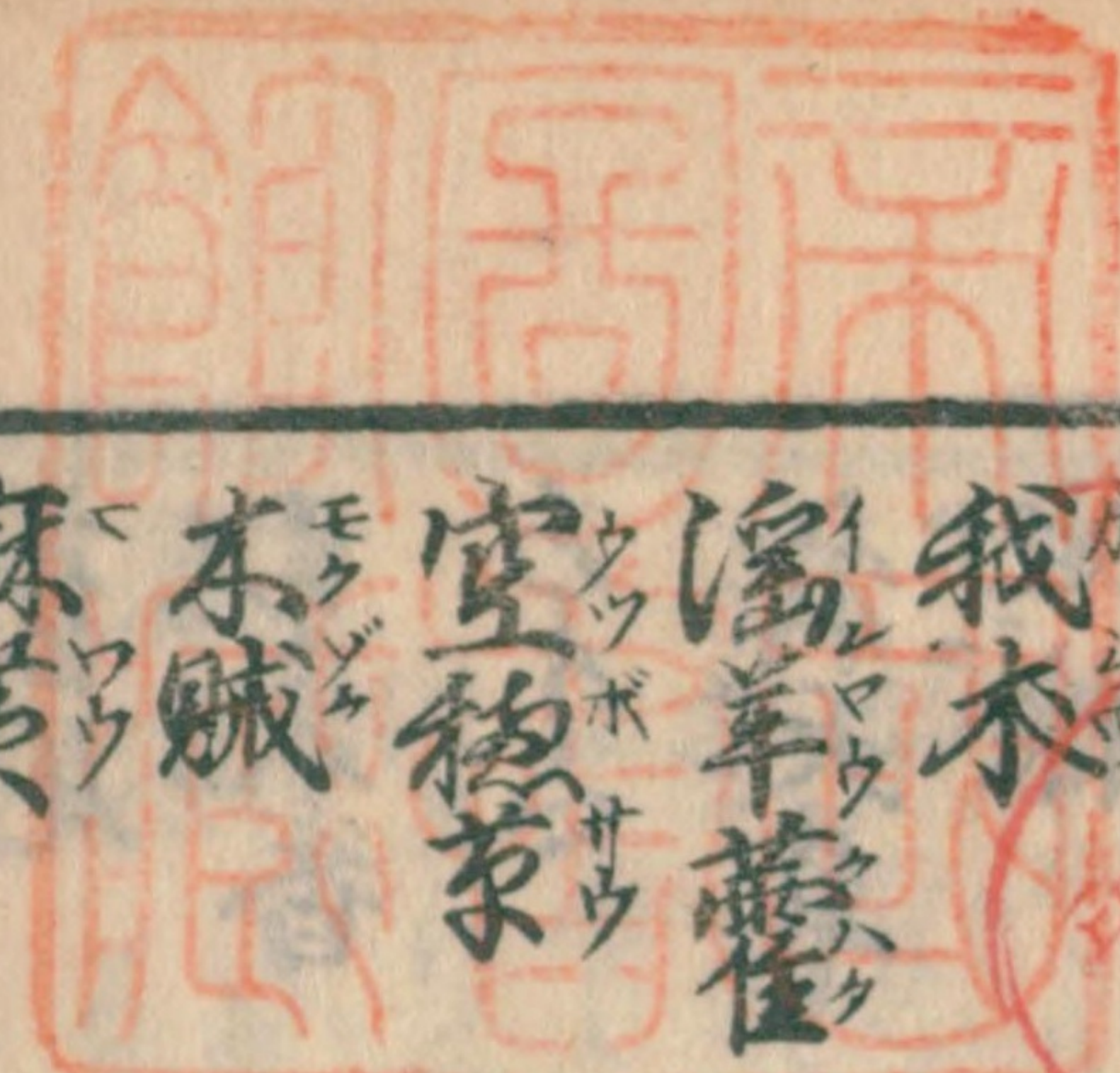
廣益地錦抄卷之六

本草五十七種

吉田待郎氏 寄贈本

目錄

- |      |    |     |     |    |     |
|------|----|-----|-----|----|-----|
| 麻黄   | 木賊 | 空穂菜 | 淫羊藿 | 我木 | 葵令  |
| 蓼    | 茵陳 | 白朮  | 菟麻子 | 陸英 | 良姜  |
| 馬薺   | 青蒿 | 苜蓿  | 三白草 | 蒴藿 | 續隨子 |
| 曼陀羅花 | 紫葳 | 威靈仙 | 苦參  | 栝梗 | 大戟  |





凡そこれいふやうの中を見  
 つけぐさく花さく事  
 をまればなり根のくち  
 各別カなるやと志との我  
 本根九カうん八根せうのみ  
 かくくさくをさく冬に  
 本中カにらるるまお抄  
**陸英** 田中ふ多く生え  
 葉軍をへりせと岩根  
 よりまげ入葉をうり地  
 あり花へる乃末林白  
 ありのくは空の大

出枝の末葉はるふ葉と  
 じまぶ八月ふ苗とせ  
 冬の中ま葉を新葉  
 よりありて縁とあらり  
 本葉より曰は葉葉中  
 より葉と生葉葉  
 があふ名付と云ふ葉  
 への葉の葉と葉の中  
 よりもま葉は縁とせり  
 物へは葉葉のくちと  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と

骨同士のせいとせし  
 あり等とせしは是とあ  
 けさくさくふい葉葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 と入ありて妙と

**蒟蒻** 葉ふはま  
 陸英ふさく似たり  
 て年々枝多うとせし  
 余ふとのりて花あり  
 ありて葉葉はふ葉と

**大戦** 山中に多うま  
 とせしとせしとせし  
 して葉葉はふ葉と  
 柳よりくさく葉葉  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と  
 せりて葉葉はふ葉と

**桔梗** 花壇に花あり  
 葉白とあり葉葉は  
 せりて葉葉はふ葉と

初秋の頃赤く赤く  
冬このんで食本  
ありて竹のく木  
ありて綿のおく  
地あり草綱目  
所くふより系陸  
おとく木の多二  
穀穂空心あり  
よくとんと陸  
藎と元一種也  
二種と人系以  
と陸英と列スト  
町孫がの小大よ

五十三

### 海羊藿

初まふるか  
さくじつに  
色と白く二種あり  
葉花ふんをさう  
さういりのさう

### 菟麻子

葉大きく切さ  
八つむとの糸  
糸にゆるり  
夏のうら七尺  
立竹のわく  
てうと糸  
よ刺さる  
子あり

陸英の葉多く  
宿根より夏冬  
蒟藿の本より  
本とあり枝と  
収めくまて

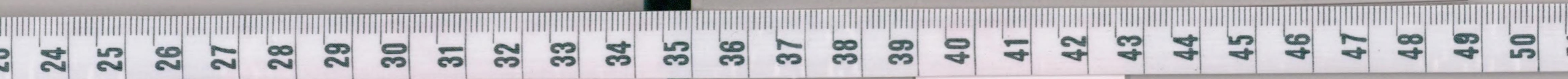
### 苦参

まろ根よりり  
冬冬多しの  
とく葉友の葉  
つと夏のはら  
豆花のおとく  
さく葉をさく  
如地一所は多  
付の葉も根と

### 白草

わりの葉ふら  
り一葉乃ゆ  
別の葉と移ら  
葉の葉と移ら  
葉の葉と移ら  
葉の葉と移ら  
葉の葉と移ら  
葉の葉と移ら  
葉の葉と移ら  
葉の葉と移ら

五十四



ガラス使用

空穂草

田中より多生ス  
葉がえり出ク冬  
に花と若ス花は紅り  
のつく又花は細く  
さくさくかきうといひ  
花乃ち多す葉ありは  
葉後へ枯る山人多枯  
草たえな葉に冬む乃  
は葉と出さ二月花は  
ひく種とあま月々とも  
徐長卿 葉はくんひ乃  
あまく西方へ

花はとんく農人田と  
枯る事と止むは種  
猪附草と

白茂

草はあまの白葉  
は葉葉とく葉種は  
白花とあり

菊胡

葉は根より生ス  
く人出葉付は  
くせり乃あまく葉に  
切せあり根はふりて  
は又尺にのり葉は葉  
より出る事あり

菊藜

葉はよく細乃  
あまくはけり  
ういさくはにけり  
岩根より生ス田中ふ  
にありあり

青蒿

葉はよく切せ  
うとあまく田の  
色に多く生ス菊藜と  
けりつりて多生ス冬  
枯て去る事あり

紫葳

葉はよく出く  
より料理ふと  
葉ありてけり

木賊

葉はよく極は  
葉はよくあり  
切りて日本乃細工は用  
時珍乃日本乃細工は用  
そのまじり光りてよく  
あまの根葉木之賊也

灌

葉はよく極は

葉はよくあり

切りて日本乃細工は用

時珍乃日本乃細工は用

そのまじり光りてよく

あまの根葉木之賊也

麻黄

麻黄は木賊に  
似くはるるが如し  
一かふ多く生え海産物  
比多しゆりてくちくちゆり  
西にゆくもびりりてま  
冬冬ともふありまあり  
て序時をばゆりて  
植て枯系 麻黄の地  
ある木賊の天へのび立  
あり

曼陀羅花

曼陀羅花は  
白く花はさくはるる  
花形はさくはるる  
ましく異形なれは倍小  
唐人笛といふをその  
しらりたり花壇に植て  
物鮮あさるるといふ  
ひらき夕にふかむ時  
が白曼陀羅花は人  
極ル 去苗は生夏長  
至直上より尺余  
子の如く八月白  
花開云

五ノ三

蓼

蓼は保羅が曰七種  
弘景冬人食食物  
といふ今料理は  
物二ありまはるる  
生えおとるる丸  
くはるる穂出く味  
に菜種も用

馬薺

馬薺は至繁をふたで  
に似くはるる  
おとるる葉は倍小  
大薺といふ今  
曰俗大薺といふ  
中間至直上より  
料理は完一と  
はるる葉は倍小  
大薺といふ今  
曰俗大薺といふ  
中間至直上より

五ノ上

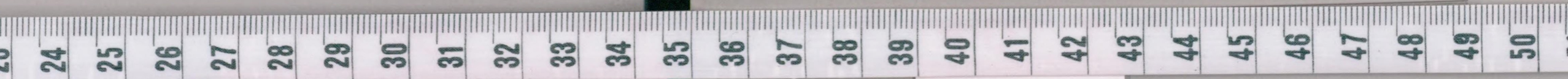
三十三

紫牽牛花の如く大に  
 朝小用夕小合すいりよ  
 々々々々々の以紫と湯子  
 せん寒濕脚氣と作  
 小兒慢驚用の紫丹也  
 鷓鴣尾 セハシ 紫のひあさきの  
 花のうらやまのこけり  
 白と紫れ二種をけるい  
 りやく多。杜若。紫首蒲  
 也。や。志。りの。い。も。花。能  
 使。花。さ。く。附。其。服。ま。り  
 紫尾の紫を中事宮

さうらあましくかま黒點  
 紫といふと地下赤花也  
 尾家小うらやまのて  
 下殿うらやまのて  
 ゆへ美名といぬたてと  
 忍冬 ニゲイリ  
 信ふとへうろくと  
 ろろく二三目とさく黄  
 色に成ぬは合衆花と云  
 まろくつれ物とつと切く  
 ひろく物と志て合衆を  
 かりて紫に成ると用

一これの美名とい初葉と  
 以根のせううれとく大  
 ちくふとりけくさく  
 毛此取小似ると紫尾  
 とりの紫も此尾の如く  
 ぐく紫尾と名付ト云  
 本草に見へりは紫蓋  
 紫乃紫小紫と紫て定  
 の方小一なつ柱と根  
 根とひらりて根はるか  
 紫尾のまろりかみ  
 石炭と紫くと紫と  
 扶也

長並ありといり冬  
 紫あり人長といり  
 と志此とありひらりと  
 するにろくと湯はん  
 一に湯湯と云へ又云  
 是いかにせんて根  
 は紫蓋小多せゆに  
 乃てふ小なりひ人冬へ  
 僕も志成ゆへ人冬に  
 せり人冬小海さり  
 功能ありと云へん唐  
 人志美といり



ガラス使用



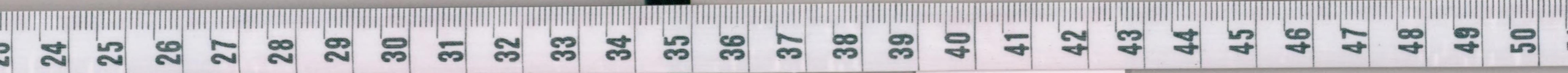


續隨子ぞくすいし



淫羊藿いんようかく

淫羊藿



国立国会図書館 請求記号 851-5  
タイトル『広益地錦抄 8巻』

ガラス使用

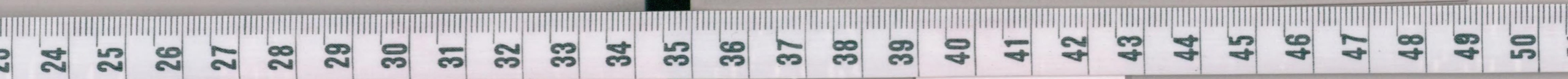


苦参  
くまんとん

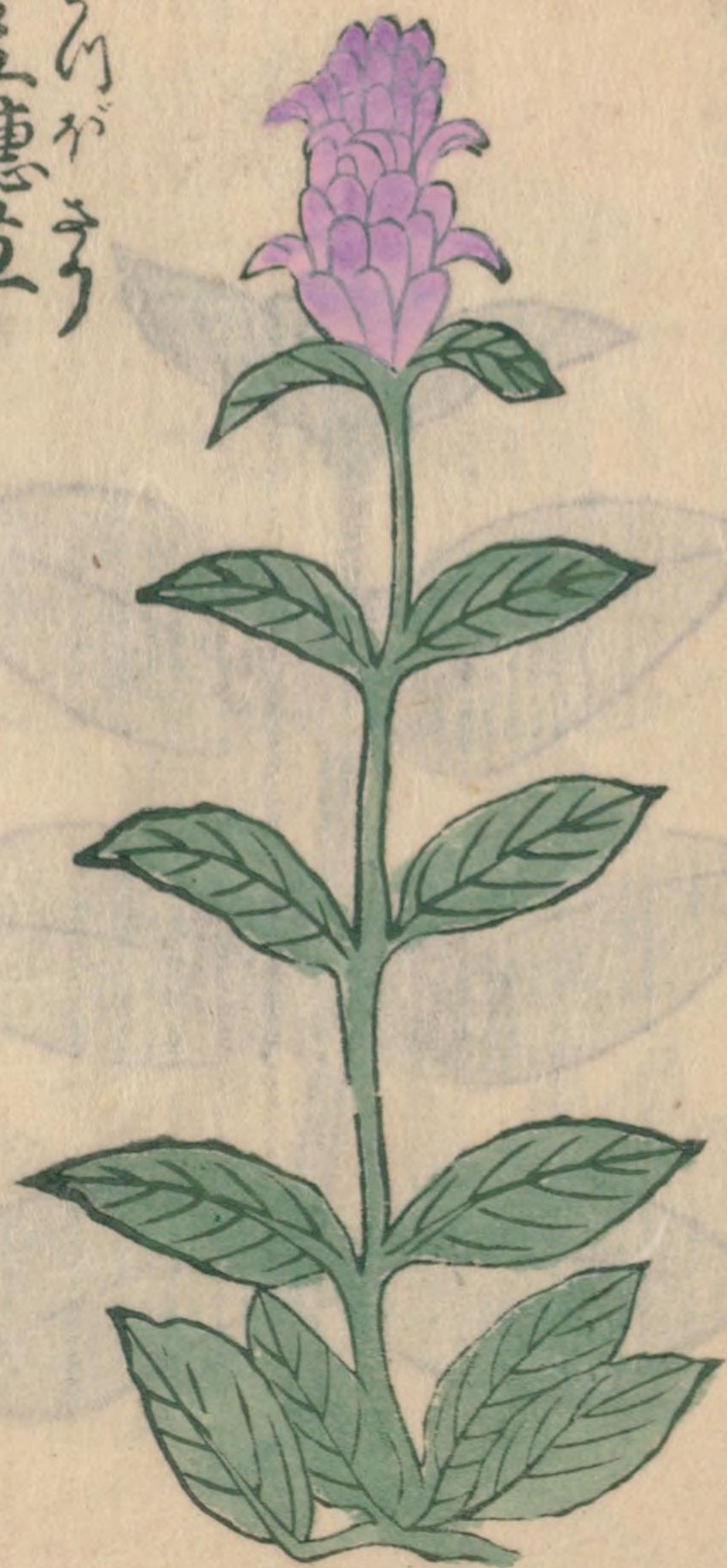


良姜  
りやうきやう

王梅  
おうばい



空穂草  
あしがら



曼陀羅花  
マンダラケ



曼陀羅花

陸英 リクエイ



徐長卿 ジョウチャウケイ



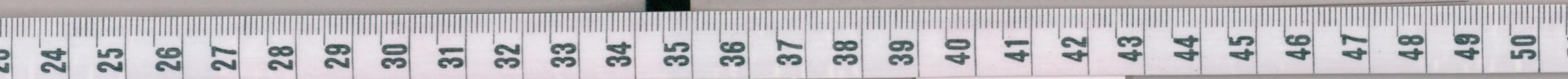


山慈姑  
花六月咲  
葉初生  
四月枯



菊藿

菊藿



国立国会図書館 請求記号 851-5  
タイトル『広益地錦抄 8巻』

ガラス使用



石蒜 セキショク  
 花ハ八月ニ  
 開ク葉ハ  
 九月中  
 五リ四月花



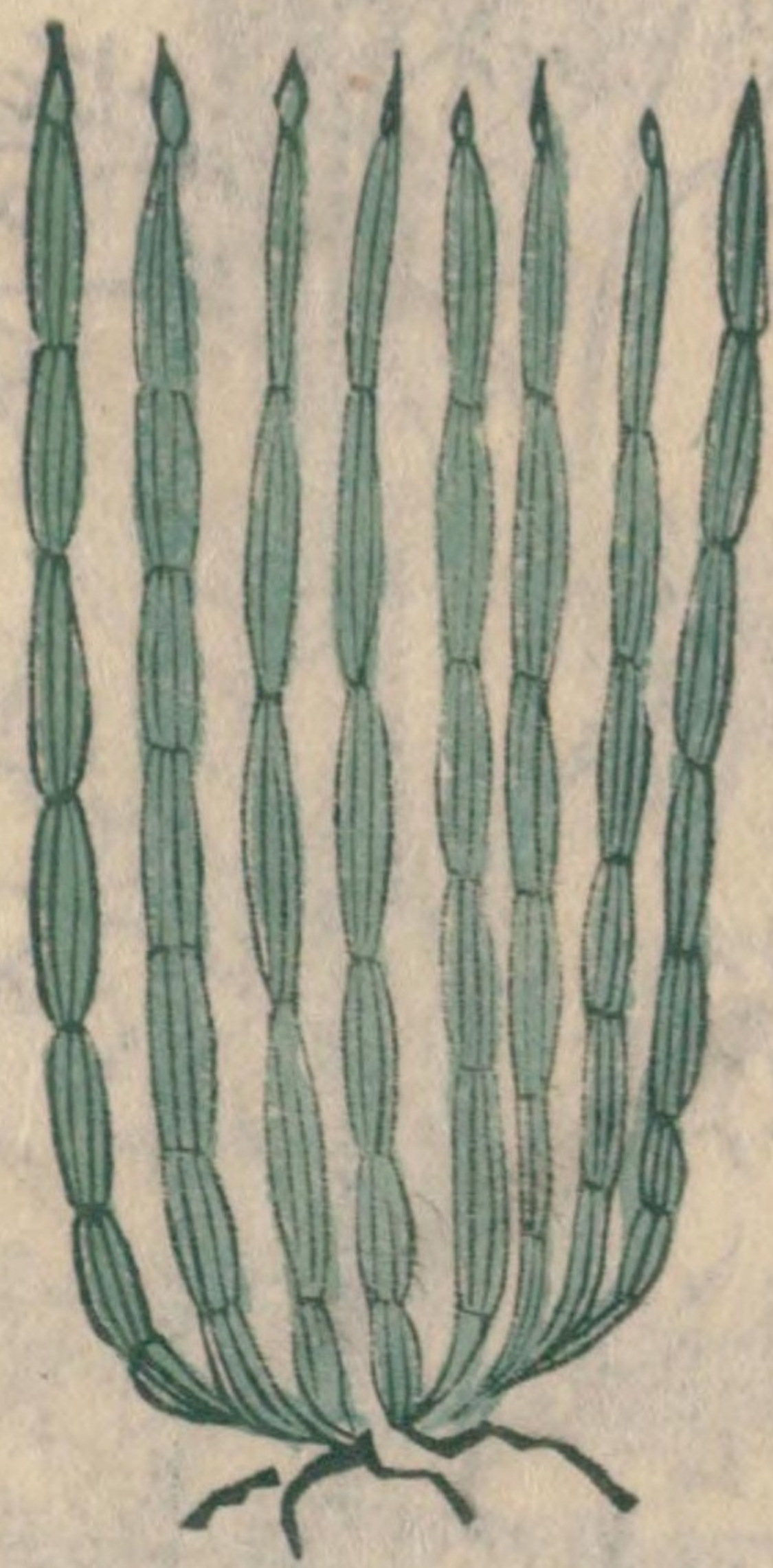
金燈草 キンとうそう  
 花ハ六月ニ咲  
 葉ハ初冬ニ  
 四月ニ枯

景天草  
けいてんそう



五味子  
ごみし

木賊しげぞう

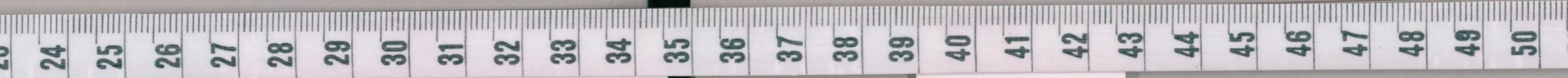


麻黄まぼう



五十四

五十四



国立国会図書館 請求記号 851-5  
タイトル『広益地錦抄 8巻』

ガラス使用





八丈草

八丈草

五ノ五



胡荽  
こむぎ  
こむぎ

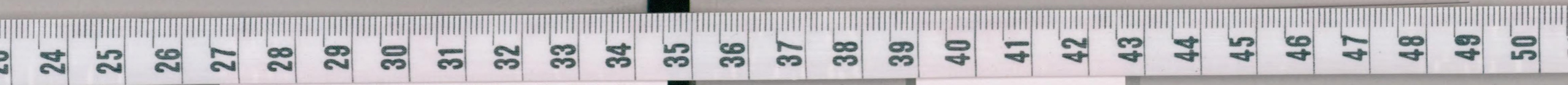
八丈草



威耳仙  
いゑのせん



五ノナ



国立国会図書館 請求記号 851-5  
タイトル『広益地錦抄 8巻』

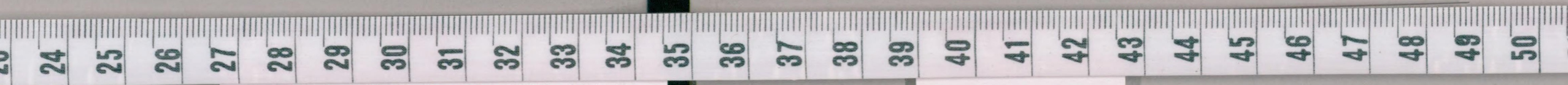
ガラス使用



地榆ぢよ



海老根えいこん



国立国会図書館 請求記号 851-5  
タイトル『広益地錦抄 8巻』

ガラス使用

萩 葵  
あいら



萩 葵



萩 葵

仙人菜  
せんじんさい



狼牙  
ろうが



仙人草

蔓草なり冬に花をば  
白花にほくさるるを  
白粉と云ふもこれなり  
がめと云ふもこれなり  
甚しく毒くらんを  
を遊ふらんかきね  
にうらやせむらんを  
いれと云ふもこれなり  
に入く毒くらんを  
ハ毒らつらんを  
ゆきと云ふもこれなり  
ゆきと云ふもこれなり

天门冬

蔓草なり冬に花をば  
白花にほくさるるを  
白粉と云ふもこれなり  
がめと云ふもこれなり  
甚しく毒くらんを  
を遊ふらんかきね  
にうらやせむらんを  
いれと云ふもこれなり  
に入く毒くらんを  
ハ毒らつらんを  
ゆきと云ふもこれなり  
ゆきと云ふもこれなり

香木香

蔓草なり冬に花をば  
白花にほくさるるを  
白粉と云ふもこれなり  
がめと云ふもこれなり  
甚しく毒くらんを  
を遊ふらんかきね  
にうらやせむらんを  
いれと云ふもこれなり  
に入く毒くらんを  
ハ毒らつらんを  
ゆきと云ふもこれなり  
ゆきと云ふもこれなり

葛根

蔓草なり冬に花をば  
白花にほくさるるを  
白粉と云ふもこれなり  
がめと云ふもこれなり  
甚しく毒くらんを  
を遊ふらんかきね  
にうらやせむらんを  
いれと云ふもこれなり  
に入く毒くらんを  
ハ毒らつらんを  
ゆきと云ふもこれなり  
ゆきと云ふもこれなり

鹹草

蔓草なり冬に花をば  
白花にほくさるるを  
白粉と云ふもこれなり  
がめと云ふもこれなり  
甚しく毒くらんを  
を遊ふらんかきね  
にうらやせむらんを  
いれと云ふもこれなり  
に入く毒くらんを  
ハ毒らつらんを  
ゆきと云ふもこれなり  
ゆきと云ふもこれなり

藤天蓼

蔓草なり冬に花をば  
白花にほくさるるを  
白粉と云ふもこれなり  
がめと云ふもこれなり  
甚しく毒くらんを  
を遊ふらんかきね  
にうらやせむらんを  
いれと云ふもこれなり  
に入く毒くらんを  
ハ毒らつらんを  
ゆきと云ふもこれなり  
ゆきと云ふもこれなり

蔓草なり冬に花をば  
白花にほくさるるを  
白粉と云ふもこれなり  
がめと云ふもこれなり  
甚しく毒くらんを  
を遊ふらんかきね  
にうらやせむらんを  
いれと云ふもこれなり  
に入く毒くらんを  
ハ毒らつらんを  
ゆきと云ふもこれなり  
ゆきと云ふもこれなり

大いし葉と根とのを  
 食絲に乃々をりする  
 一葉と根とあつてゆき  
 牙にさすのあつて食之  
 本と根とくまりのを  
 しつつかさぎを根に  
 わりまのてらひさり  
 本とて根  
 胡椒 葉に肉に切  
 のどくたうとをあり  
 花葉をふやさしを葉  
 直りくをわきを葉

粉にうして食あるひ  
 色をおよばくかむひ  
 いはををわうさうの  
 どのを死せどとり  
 痘瘡のなまひ草と  
 新に種くを葉一か  
 多しといふ文傳又  
 痘瘡のよるひ一切  
 い葉乃の葉ゆあん  
 とさつりか葉細  
 枝葉をふ女國  
 酸葉とけくを氣香  
 して味をわく

大いし葉と根とのを  
 食絲の汁よるゆき  
 一葉と根とあつてゆき  
 唐人の種とてのを料  
 花葉をふやさしを葉  
 直りくをわきを葉  
 花葉をふやさしを葉  
 直りくをわきを葉  
 花葉をふやさしを葉  
 直りくをわきを葉

の人毛と合といひ  
 海中有魚を葉とゆき  
 味あるをわきを葉  
 との味をわく  
 花葉をふやさしを葉  
 直りくをわきを葉  
 花葉をふやさしを葉  
 直りくをわきを葉

一七ウー一と子又倍  
 今くくして女足臨面  
 儼又わくふれいふいふ  
 け系としてゆるぎ  
 又大熱風後いふ  
 ぬえくくくくくくくく  
 やめしてわあるひの草  
 穀乃興地と食早此  
 今死かいたと服と  
 又今ひく此毒にわたり  
 今ふけ実と服と七  
 末のひく和と丸九  
 花とたとのふまもま

五ノ十九  
 て付ケ甚あうしあり  
 せりふ何瘰癧ありし時  
 い草と口よかき道その  
 瘰癧とのぞくといわり  
 わりさう知してまうりた  
 痒めくくわには茶と  
 酒よせんし瘰癧よわ  
 ぶくは甚妙なり  
**いんせ**  
 薬と海くふ切  
 わりてうささう  
 林く一尺たの小葉  
 今のそのひ張まよて  
 多く生介料も多用

てとらういふまもま  
 魚後奥あむしものり  
 括て介の熱具と止  
**阿茶陀茶**  
 小葉のり  
 ほとく極中て熱  
 ゆりかあくとくぶてり  
 花らさるべ葉乃あが  
 わ系中花より  
 西へ山岩石に生葉  
 若根山岩と用名  
 今と茶と夫婦乃  
 産は産あ法の麻

茶とやうくあが  
 わり花のり  
**芭蕉**  
 生ス草中む太  
 成りあのり  
 葉よお林と止といり水  
 肝服油よせ葉あ  
 ぬらり又血とく止  
 たりとやとやと乃  
 皮よとまけたんや  
 血ととめてさずいゆ  
 とき液油とくして  
 とくくけつこへ瘰癧思



景天草

見ド用て妙なり云  
景天草の葉は白く  
つと白く縁其は白珠  
と云てうら葉と葉の  
おしく花一両ありあり  
さて白く口紅わけて  
うらつと小葉あり葉  
と切て煮あぐ紙とく  
より煮すして葉と葉  
より煮すに竹葉と煮  
かきに令漆血止す  
葉花よんじさうと云

山慈子

優曇曇花のふ  
初葉乃以葉  
と云すあ仙の  
葉はおしく初夏のは  
葉は枯て六月まか  
かす一夏に四又まん  
丹の色はうと紅あり  
根を煮あぐのこく玉

三七

吳名天びん草又ハ  
けかんさう大いふ  
三七 葉は根より生花  
の葉ふらり根は令漆  
血と止公ハ草綱目其  
葉は左右四故葉は  
恐ハ不松本名山漆其  
能ク令令瘡如漆物  
根は近道と云り

地榆

地榆 葉は根より生  
芒乃るひあり  
根は令瘡如漆物  
根は近道と云り

令燈茶

時珍曰所くふる冬  
月小葉と生二月に枯  
一夏に乾乃如ク花  
白あり紅あり根諸毒  
と解万病解毒丸に  
い根と才一入ると茶  
綱目あり  
令燈茶 葉は根より生  
葉は冬くひろく葉は  
夏枯花は六月まか  
花乃るうと白くさう  
りらあり是時珍曰

花はさうりといふ根ハ  
 葉は乃地輪く秋の末  
 穂と切り白くびに花  
 立花乃下葉にう  
**玫瑰花** こまかす 荊せうりび乃  
 去出花は三月ひく  
 紅葉をひくと大まん  
 びんのとくは葉ま  
 一実丸く少葉らんご  
 のとくうらん久そほ  
 ちかくて朱紅を又花  
 より色よりて色あり

花は白紅さうりと云白  
 花のるひさりの葉花  
 に唐さん一こたひふ  
 倍多ふ仙とりふ  
**石蒜** いさかん 是もとさん一この  
 花は八月中のひひく  
 色は朱紅花は葉は  
 多くも倍は曼珠花  
 といふ根ハ水せんのとく  
 ありふさすりの根は  
 ちまうに花のそ花よか  
 しませ屏風をむくの

時珍ク曰く二二三尺枝  
 多く刺あり葉はさうり  
 小葉を有りは花はあり  
 四月花は大きき花は花  
 乃とく小葉は葉の多  
 ちらん葉はとくそり  
**らうり** 本も葉も花  
 花はさうりあり  
 ちく花は色白牡丹  
 のとく花はの葉は  
 葉は日の葉の葉は  
 のとく花はさうりあり  
 花はさうりあり

花はさうりありと云  
 と虫とむさうりあり  
 多くも倍は曼珠花  
**水仙** すいせん 今多く葉花は花  
 ちり花の葉とせり  
 唐さんと二葉の葉は  
 乃かりあり花はさうり  
 時珍ク曰く金盞花  
 花はさうりありあり  
 ちり花はさうりありあり  
 ちり花はさうりありあり  
 ちり花はさうりありあり  
 ちり花はさうりありあり  
 ちり花はさうりありあり

五ノ廿二  
て根ふ所を指い

威靈仙

根をみ葉  
づきくび

車にどくに根を指し  
にのぼる故に葉をみ  
車三七九蓋草とも  
のみ死にうとひつさ死  
久梨根のころらそ七  
み月ひくくかづあまう  
穂ふくまてさむらの尾  
といふ葉死よ他り

白朮

葉死にふ  
ぐ柳のあま

て根ふ所を指い  
くして勝るふ付くま  
妙也又らら死乃根よま  
るる文字どねぐひよん  
水仙乃根の切りめそを  
かそ死に根よあてあ  
とらるとりまの死  
葉付らるとい較て較  
きりあると教書とより  
ねぐあへーとど

狼牙

所く芝野乃中  
に多く生え宿

根より生え葉よ切  
ありて葉乃にんざん  
又ハ大根のあまをれと

菝葜

葉死にふ  
葉丸く株乃葉

のらふさたてくして葉  
中に三つ此葉あり冬  
葉葉葉の死に枯葉く  
葉ありの修ふサレキラ  
イトとと又ハサルトリ  
ハラとまりの根より

倍ふ也大らんとも花  
うすけりさ記むと菊  
乃あり花夜の夜  
に有り観木能は竹り  
さく葉たろ名と叙  
のりううとりみ林ひ  
らく

綿けむりが素す見み

田野ふまき  
宿根より  
移毛葉も山蒸姑乃  
みくもまき夏有り  
そゆ根乃ありに花  
さくたりとやみす乃

勢りとりなる人敷  
槐乃葉れあし花を  
かうらん花のま一尺  
斗を計たさくまて  
各別の物又の名と  
りあがたりあり地  
を名武列株父乃  
山中へまうり  
農家密あふ産な  
小麦乃粉とあま練  
丸くらみりていさ  
乃葉とあ方よりあ  
梅解乃あし

おろかろり花たろと  
く根ら多くとまざりそ  
細乃とぬくびとある倍  
にウシウロウと云

蘿くろくま摩ま

蔓葉そりる  
根もそまき宿根  
よりそまきわそまき  
あひくあ射しそまき  
す白く筋あり根とあり  
て火ふあがりの食そまき  
葉切まむくけと赤腫  
にありて早くいらそま  
山テりもまきと白の靴

わうそくふ焼てりらと  
あ一葉無一ぬ葉と  
とまべりらふ二條の枝  
足くあひくおとま  
ほくくくくくくく  
まいふいふいふいふ  
むとあけへ一まき  
あ乃女あるに花ハ  
け平のちねむくは葉と  
月とこ子細ありや  
同のゆらよまきあ  
まらひて行来甲の  
らん是と毒甲解と

五ノ廿四

851  
5

海根ウヅ

大キうとたのあしくおひ  
うと白く花中葉茂花  
とわのやくあみうて  
作くせり実丸くらひさ  
く多く付んあさう

田野小多く生え  
葉毛薺多し葉に  
大平く中に葉あさ  
わそあぐく二月より  
とさの穂のおしく也  
花よあさ葉と云

白頭ハクダウ

葉を層積乃一味あ  
色は長壽の縁やと  
やうがや

芝野の中に  
多くせ葉切  
わのくうと白く毛あ  
花らほりうさうのか  
からあく葉知も二月  
中のほくくらん葉と云  
葉花乃あしく白く毛あ  
銀のぶらうあしく風小  
あさびひてあさ葉

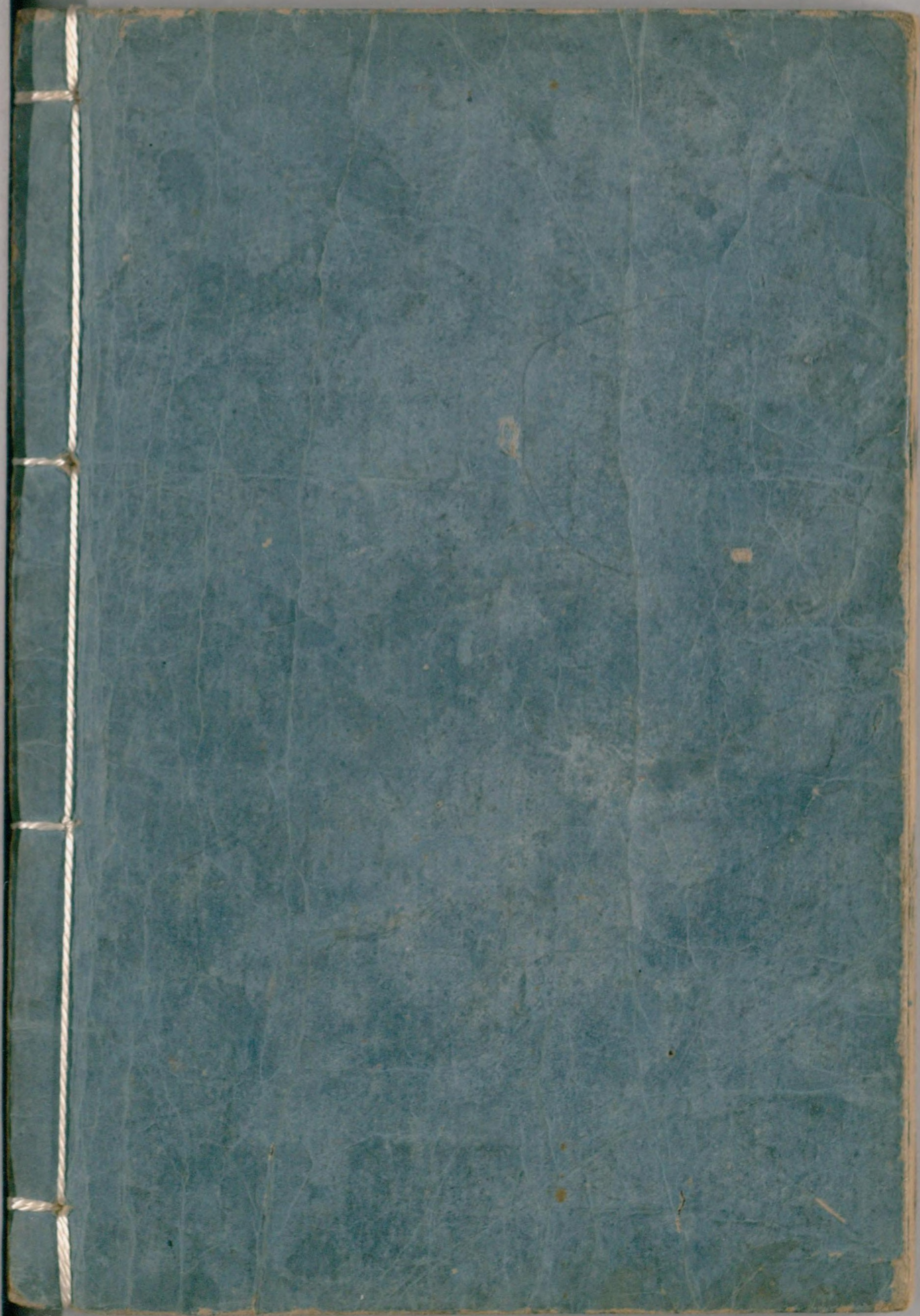
五ノ七五終

菁アヲ

燒を思身とけと花ハ  
らうふらうた実ハ花を  
もく二回す汁とさうとせ  
がのそをらまのどく林  
の根葉一しれて二河は  
し色中より葉乃とく葉  
多くお九て葉の葉と  
しとわあうと葉あめり花よ  
生葉葉の中にも多く生  
葉を葉の葉に多く生

蔓草冬をとりあり  
葉をまき出あ射  
ゆく魚身ありと云  
葉将乃丁よりくくら

ひは葉とくあめらうと  
花葉乃根葉乃甲に  
ゆく又葉とあつた葉  
乃葉をまき入とりの食  
しと葉をとりひは葉  
ととくあさ葉ばとそ  
いさうの人乃とこの葉  
ととそがくしと葉らう  
るさうとく田舎人の  
りひとて又葉葉さ  
まもとくそあさと云  
とひとととく葉を葉



国立国会図書館 請求記号 851-5  
タイトル『広益地錦抄 8巻』

ガラス使用